

Y K K ファスナー (英国) [B]

5

Y K K ファスナー (英国) 社の支社長高橋進氏は、「英国病を日本人は治せるか?」と題するインタビュー記事に端を発したジャーナリストたちの面会依頼をすべて断わることに決めた。ランコン工場の南工場長に対してもその旨を伝え、従業員への対応のしかたも指示した。

ランコン工場ではとくに年配の婦人従業員たちが「我が社の従業員は怠惰だ」という同社最高幹部の発言を伝えた地元新聞の記事に憤慨して、南工場長のところにつめかけた。南工場長は従業員食堂 10
に行き、従業員を前にして「あなた方が怠惰だなどという気持を我々は全くもっていない。あの新聞記事はまちがっている。インタビューの脈絡 (コンテキスト) が無視されており、記者のとりちがえだ」と説明し、弁明は一切しなかった。

高橋氏も南氏もジャーナリストの取材に応じなかったので、ランコン工場では新聞記者が従業員に面会して取材した。婦人を中心とした従業員は新聞記者に対して「我が社のマネジャーがそんなこと 15
を言うはずがない。新聞社のまちがいです。その証拠に、先のクリスマスボーナスも、私たちがよく働いたからと、これこれの額をくれたのです」と答えた。「ランコン・ウィークリー・ニュース」の翌週号には訂正記事が載った。

高橋氏はこの事件を振り返って次のように語った。 20

「あの時は四面楚歌でした。“嵐の最中は黙っていた方がよい”と考え、工場にもそのように指示しました。雑誌記事を読んで、“言いたいことをよく言ってくれた”という人も居ました。しかし今は、外国人としてはあゝいう発言は慎しむべきだと思っています。外国人の発言は10倍にも20倍にも大きく伝えられるものです。また言葉の問題もあって、細かいニュアンスの違いから誤解されることもあります。この事件は我々としてもよい反省になりました。よく考えてみますと我々の心の中 25
に英国人を見下すような気分もあったことは否定できません。外国人経営者として、社内のことはともかく、国全体の批判は口にしてはいけないのです。工場の地元の人々は我々を歓迎してくれていても、国全体から見ると必しもそうではないという場合がまゝあるのです。」

工場の日本人マネジャー佐伯氏は当時のもよみを次のように語った。 30

「従業員から “こういう記事がのっているが、知っているか?” とあの新聞をみせられました。私は “言葉の取り違えじゃないか” と答えましたが、親しい連中には冗談に “たしかにおまえたちはレイジーじゃないか” と言うと笑っていました。その記事が出た翌日、南さんが体を悪くし

このケースは、慶応大学ビジネス・スクールにおけるクラス討議の資料として用いるために、同ビジネス・スクール教授石田英夫が作製した。ケースは経営管理上の適切または不適切な処理を例示しようとするものではない。本ケースの著作権は慶応義塾大学ビジネス・スクールが所有している。1977年10月作製。 35